

教わる人から教える人になって思うこと

東海大学健康科学部社会福祉学科 教授 小林 隆 児

福岡大学精神医学教室在籍中の思い出は数多い。今私が取り組んでいる自閉症に関する臨床研究で、日頃浮かんでくるいろいろなアイデアのもとになっているのは、教室時代の体験に根ざしていることがいかに多いかを日々実感している。教室在籍中はもっぱら教わることの多かった立場であったが、教室を離れてからは立場が逆転して若い人々を教える身となり、すでに10数年を経過した。

私はこれまで自分のやりたいことをやってきたという思いがとても強いが、今振り返ってみると、教室在籍中は精神分析学をはじめとして力動的精神医学を学ぶことにはあまり熱心なほうではなかったように思う。ほとんど耳学問とっていい程度のものでしかなかったが、おそろしいことに今では患者の見方、治療の進め方どれひとつとってみても、当時学んだことがいかに強い影響を自分に与えているかを痛感することが多い。

現在私は福祉の世界に籍を置いていることもあって、福祉現場の職員の指導に関係することが多いが、3年あまり前からある自閉症者専門の更生入所施設（静岡県御殿場市にある施設である）の設立当初より、その職員と一緒にあって自閉症療育の望ましい形を実現しようと努めている。

自閉症を初めとする発達障害の人たちへの治療は、以前は医療現場でもかなり熱心な取り組みが行われていたが、今ではそのほとんどが福祉現場に依っている。このこと自体はさほど悲観することでもないが、残念なことにこれまでの福祉現場の職員は主に利用者の生活指導に力を注ぎ、発達障害の難しい状態を呈している人々への治療ないしは援助をどのようにしたらよいか、その経験も考え方の基本もきわめて貧弱なものであった。そんな状況の中で、新しい施設づくりの中で私は自分の目指す自閉症治療を新しい職員とともに試行錯誤の中で開発してみようと思いついた。そこで私がとても驚いたのは、その施設で実践している試みが、精神医学教室で体験したことをモデルとしていることが実に多いということであった。職員を指導する際に、家族面接に同席させてカルテに記録させたり、回診形式で利用者の状態を職員から報告を受けていることや、事例検討を行う際の問題整理の方法、見立て、当面の方針の立て方などをみってみると、まるで精神医学教室時代の病棟カンファレンスをやっているかのような錯覚を覚えることさえある。

若い学生や医師、臨床心理士、社会福祉士、施設指導員、ホームヘルパー、精神保健福祉士、医療ソーシャルワーカーなど、実に多くの職種の人々を指導する立場に立たされるのであるが、

その時の私の指導のやり方は、自分の受けてきた指導そのものを踏襲していることにふと気づかされるのである。そんな時にはきまってこれまでの自分の受けてきた精神医学教室時代の教育は、実に恵まれた体験であったことを実感するのである。

対人援助を基本とする仕事に従事する人たちにとっては、古めかしい言い方ではあるがいい意味での徒弟制度の中で指導者から体験的に盗んできたものが、非常に大きな力となるということである。今日流行りのマニュアル教育ではけっして得ることのできないものがその中に潜んでいるといえようか。

医療現場や医学教育現場があまりにも忙しくなってしまう、徒弟制度のような師弟の密接な体験教育の場が失われつつある現在、福祉現場に私は自分の夢を実現させてみたいと思う今日この頃である。そんな時、精神医学教室時代の体験が今の自分の財産となっていることを実感するとともに、西園教授の指導を受けることができた幸運を心から感謝している。